

## 私撰「パーソン・オブ・ザ・イヤー」

第一特別調査室長

せいの かずひこ  
清野 和彦

米国「タイム」誌による、昨年（2019）年の「パーソン・オブ・ザ・イヤー」に選ばれたのは、地球温暖化によるリスクを訴えたスウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさんであった。弱冠 17 歳にして全世界にインパクトをもたらした彼女の選出に対し異論を唱える向きは少なからうが、小欄では、昨年、知名度が急上昇した人物である、中華人民共和国香港特別行政区のキャリー・ラム行政長官を「パーソン・オブ・ザ・イヤー」に挙げてみたい。

同長官が、2018 年 3 月に河野外務大臣（当時）と香港にて会談したことはおろか、同年 10 月末に日本政府の招待により訪日し、香港貿易発展局主催のシンポジウム“think GLOBAL, think HONG KONG”に出席していたなどということを知る日本人はあまりいないに違いない。しかしながら、昨年初夏以降、我が国でも「香港の林鄭月娥（りんてい・げつが）行政長官」と頻繁に報じられ、その名が一躍人口に膾炙するに至った。

同長官は、1957 年 5 月香港生まれ。専攻を、当初のソーシャルワークから、社会問題の原因を更に探究すべく社会学へと変更した香港大学卒の才媛で、1980 年 8 月、当時の香港政府に入り、1997 年の香港返還を挟み 36 年以上にわたり公務員人生を歩んできた。この間、英国ケンブリッジ大学やフルブライト・プログラムにより米国において学んだ経験も有している。その後、特区政府ナンバー 2 である政務司司長を経て、2017 年、第 5 代の行政長官に当選した。「林鄭」とは、父親の姓が「鄭」であるところ、数学者である林兆波博士との結婚により「林鄭」と称し、英語名では、夫の姓の「ラム」（林）を用いている。

さて、ラム長官が舵を取る香港は、昨春の「逃亡犯罪人条例」改正案提出以降、その内容に係る懸念や不安が社会全体に拡大し、6 月以降は大規模なデモや抗議活動が頻発している。改正案は撤回されたものの、抗議活動が収まる気配は全くない。本稿執筆時点（1 月）で、逮捕者は 6,943 人を数えるに至っている。また、11 月の区議会選挙では、投票率が過去最高を記録するとともに、民主派が「圧勝」し、政治の風景が一変した。

実際に、昨年末から年初にかけ訪れた香港では、例年とは大きく異なり中国大陸からの観光客の姿を余り見かけることはなかったが、欧米からとおぼしき観光客は、ゆとりを持って観光を楽しんでいる様子だった。一方で、抗議活動により壊された駅や銀行の設備が目についたほか、例えば、路線バスの窓枠や横断歩道といったところにまで、マジックペンでラム長官や中国共産党を詰る言葉が書かれていたのが印象に残った。

民主派等の「五大要求」に対し、特区政府側は改正案撤回以外の 4 項目に全く応じる気配がない。ラム長官が何らかの手腕を発揮して事態を收拾し、真の「パーソン・オブ・ザ・イヤー」になる日が、果たしてやって来るのか。香港情勢から目を離すことは難しそうだ。